教科等名：体育
グループ：小学部Ｉコース高学年ブロック

事例報告者：教師A

１　研究グループの概要

[教員]　１３名　　小学部６名
中学部３名
高等部４名
} 体育専科９名

[対象]　小学部Ｉコース高学年ブロック
保健体育グループ

児童１７名、教員８名

２　事例研究の経過

①実態把握

②授業実践

③学習の様子

④考察、授業改善

実態把握① １学期

指導内容及び目標の段階一覧（R7　１学期）　　教科（　体育・保健体育　）

コース			II コース			コース													
学部			小A	中A	高A	小低			小中				小高		中			高		
グループ						1G	2G	3G	1G	2G	3G	1G	2G	3G	1G	2G	3G	1G	2G	4体
指導者	CT 免許 体育専科		非公開																	
指導者	ST数																			
児童生徒	児生数		6		3	19			19			17			18			29	1	29
児童生徒	国語の段階	集団の上位	小1		小1	小2			小2			小2			中2			中2	中1	中2
児童生徒	国語の段階	集団の下位	小1		小1	小1			小1			小1			小1			小1		小1
児童生徒	数学の段階	集団の上位	小1		小1	小2			小2			小3			中2			中2	中1	中2
児童生徒	数学の段階	集団の下位	小1		小1	小1			小1			小1			小1			小1		小1
単元1	【体つくり運動】 目標の段階（上位）		小1		小3	小1			小2			小2			中2			高1		高2
単元2	【器械・器具を使って】 目標の段階（上位）		小1						小2			小2			中2					
単元3	【走・跳の運動　陸上】 目標の段階（上位）		小1						小2			小2			中2					
単元4	【水遊び・水泳】 目標の段階（上位）		小1		小2	小1			小2						中2					
単元5	【ボール遊び・球技】 目標の段階（上位）		小1						小2			小2			中2			高1	高1	
単元6	【武道】　中者のみ 目標の段階（上位）																			
単元7	【表現遊び/運動　ダンス】 目標の段階（上位）		小1																	
単元8	【体育理論】　者のみ 目標の段階																			
単元9	【保健】 目標の段階（上位）														中2					

1G
17
小2
小1
小3
小1
小2
小2
小2
小2

実態把握①　２、３学期

指導内容及び目標の段階一覧（R7　2学期）　　教科（　体育・保健体育　）

コース			II コース			コース													
学部			小A	中A	高A	小低			小中				小高		中			高		
グループ						1G	2G	3G	1G	2G	3G	1G	2G	3G	1G	2G	3G	1G	2G	4体
指導者	CT 免許 体育専科		非公開																	
指導者	ST数																			
児童生徒	児生数		6		3	19			19			17			18			29	1	29
児童生徒	国語の段階	集団の上位	小1		小1	小2			小2			小2			中2			中2	中1	中2
児童生徒	国語の段階	集団の下位	小1		小1	小1			小1			小1			小1			小1		小1
児童生徒	数学の段階	集団の上位	小1		小1	小2			小2			小3			中2			中2	中1	中2
児童生徒	数学の段階	集団の下位	小1		小1	小1			小1			小1			小1			小1		小1
単元1	【体つくり運動】 目標の段階（上位）								小2			小3			中2					
単元2	【器械・器具を使って】 目標の段階（上位）					小1			小2			小3								
単元3	【走・跳の運動　陸上】 目標の段階（上位）					小1			小2									高1		高1
単元4	【水遊び・水泳】 目標の段階（上位）					小1			小2											
単元5	【ボール遊び・球技】 目標の段階（上位）					小1						小3			中2			高1		高1
単元6	【武道】　中春のみ 目標の段階（上位）																	春1		
単元7	【表現遊び/運動　ダンス】 目標の段階（上位）														中2					
単元8	【体育理論】　春のみ 目標の段階																			
単元9	【保健】 目標の段階（上位）														中2					

1G
17
小2
小1
小3
小1
小3
小3
小3

実態把握②

【グループの児童の様子】

・１７名の児童がおり、１名は医ケアの児童、他に発語がない児童等がおり、ジェスチャーや示範等で伝えている。

・小学部３段階の内容に取り組んでおり、マット運動では前転がスムーズにできる。ボール運動では、相手や的を意識して投げることやキャッチすることが難しい児童が多い。また、ゲームの勝ち負けを理解できる児童は少ない。

授業実践

【教科名】体育

【単元名】ポートボール

【単元設定の理由】

１単元観

（１）仲間と協力しながらパスを繋いだり、的を狙ったりしてほしい。

（２）「ボール」「はい」「こっち」等の声を出すことで自分の意思表示をしてほしい。

２指導観

（１）パスやシュートの時に「はい」「シュート」等の言葉を使う力を付ける。

（２）パスをつないで得点を取る競技であるため、児童同士が協力することを意識する力を付ける。

【学習指導要領上の段階】小学部３段階

【単元の目標】

知	・ルールを理解しきまりを守ってパスやキャッチなどのボール操作ができる。
思	・他者との連携を考えてパスをつなぐことができる。
学	・ルールやきまりを守り、他者と協力しながらゲームを楽しもうとしている。

実践①

【本時の内容】ボールを友達に投げてみよう。

【本時の目標】

知	・両手を使ってボールを投げることができる。
思	・的や友達の声を聞いてパスすることができる。
学	・ボールを扱うことを楽しもうとしている。

学習の様子（教科の力）

実践①

・ボールに慣れるために、一人でボールを扱う活動を行った。

・他者（教師）からボールを投げてもらう。最初の段階でボールに慣れてもらうため、座った状態でボール転がしパスをした。

授業者の考察（教科の力）

実践①

①成果

・ボールを使う活動を楽しみにしている児童が多く、積極的に活動に参加する姿勢が見られた。
・座った状態で転がすパスは、怖がらずにキャッチすることができる児童が多かった。
・自分一人でボールを触ることに抵抗はない。

②課題

・他者から投げられるボールを怖がる様子が見られた。

議題：ボールを扱うことの抵抗感を減らすには

グループ１	議題（教科の力） ボールを扱うことの抵抗感を減らすには	メンバー 教師A　他５名

良いところ

実態把握

実態別で実践したこと

スモールステップでした所は、よかった。

課題等

教材の工夫

バスケットボールは重くてかたい

ハンドリング時のボールが重すぎる。バレーボール位が良い。

★教材の提案★

キャッチしやすいボールを使って繰り返し取り組む

スポンジボール

新聞紙のボールはどうかな

ビーチボールや風船にしたらどうかやさしいボール

指導方法の工夫

ボールの受け取り方

ボールの受け取り方を増やす

キャッチはワンバウンドまでよい

キャッチではなく、まずは手に触れる練習から

パス

バウンドパスの方が簡単

近距離からパスするちょっとずつ広げていく。

試合方法

３回程度パスをしたらゴールできるくらいのゲーム制

グループ２	議題（教科の力） ボールを扱うことに抵抗感を減らすためには	メンバー 他６名

良いところ

実態把握

ボールを転がして
パスをする段階から
スタートしたこと

課題等

教材の工夫

ボールのサイズ

★教材の提案★

ボールを柔らかくする

ルールの工夫が必要

指導方法の工夫

ボールの受け取り方

パスを受ける際は、
タッチするところから
始めてもよい

対大人と練習する方が
恐怖心を減らすことが
できるのではないか

パス

パスをする際の
距離感を工夫する

導入

自分でボールを
コントロールする
ところから始める

集団討議による考察（教科の力）

実践①

①成果

・実態ごとのグループに分けていたこと。

②課題　１０月の研究報告で出た課題

・ボールを自分でコントロールする体験を増やす。
・抵抗感を減らすため、対大人で練習をしていく。
・ボールの種類、素材感を変えていく。
・パスの距離、キャッチの受け方を工夫する。

学習の様子（言語能力）

実践①

・ポートボールという競技名を視覚的に提示し、復唱させた。

・パスの練習は、「はい」と言ったらボールを教師が転がしてパスをするようにした。

・発語がない児童は、手を挙げるジェスチャーをするようにした。

授業者による考察（言語能力）

実践①

①成果

・「はい」と言ってボールをもらうことができた。

②課題

・「ボール」、「こっち」等の他の言葉を入れながらパスを繋いでいけるようにする。

議題：「ポートボール」「パス」「キャッチ」「はい（受け取るとき）」　言葉の精選について

グループ１	議題（言語能力） 言語：「ポートボール」「パス」「キャッチ」 「はい（受け取るとき）」　言葉の精選について	メンバー 教師A　他５名

良いところ

言葉の精選

言葉の内容〇
量も十分
これ以上増やさなくてよい

課題等

ふりかえり

感想（振り返り）で
選択したり発表したりで
きたらよい

言語能力の向上

ジェスチャーと
言葉の一致
（狙える児童）

手を挙げる方に重点を
置いてもいいのでは

実態把握

ペアリングを工夫する

迷っても自分が決めた相手に
投げたりキャッチできたりしたら
よいのではないか

グループ２

議題（言語能力）
「ポートボール」「パス」「キャッチ」
「はい（受け取るとき）」　言葉の精選について

メンバー
他６名

良いところ

教材の工夫

視覚的教材の使用

CTが積極的に
言語化しようとしている

言葉の精選

言葉を覚えさせようとするのであれば、十分な気がする。

課題等

ふりかえり

活動後に振り返りで
言語化を求める

活動の合間合間に
何をしたのか振り返るといい

言葉のやりとりを増やす

パスの際は名前を呼ぶ

児童同士のやり取り、
関わりが自然に生まれるような場面設定
⇒よりよい協働的学び

STの関わり方

ポートボールのルールや用具の
名前だけではなく、
勝ち負けの感情を表現する

STの教師が意図的に、
大げさにつかうのもあり？

集団討議による考察（言語能力）

実践①

①成果

・視覚的支援や教師の示範があるのはよい

・言葉の数は適量

②課題

・実態に応じたやりとりを増やす。

⇒パスをする時に相手の名前を呼ぶ等

・振り返りの時間を設定し、感想や気持ちを言語化する機会を作る。

・STの関わり方

⇒児童に選択させたり確認したりする時間の設定や視覚的な教材の活用

⇒「やったね」「勝ったね」等、STが言語化する。

学習の様子（教科の力）

実践②

・ボールの種類、素材感の変更

新聞紙を丸めたボール

２人でパスをする様子

実践②

パスの距離、キャッチの受け方

ワンバウンドしてから
キャッチしても良いという
確認をとった

３人でパス⇒シュート

実践②

授業者の考察（教科の力）

実践②

①成果

・紙を丸めたボールでパス練習をすることで、ボールに対する怖さが少し軽減された。
・毎時間使うことでボールに慣れてきている。

・ペアリングを工夫することでパスをするときに安心感がでてきた。
（パスが強い児童同士で組み、距離を開ける等）

・パスをする人数を２人から最大５人に増やしても、立ち位置やパスをする相手を明確にしたことで、シュートまでボールを繋げられるようになった。

（教師が台に立ちゴールとした。実態に応じてガードマンも設定した）

授業者の考察（教科の力）

実践②

②課題

・試合のスピード感がない

・ボールがとまってしまう

（ボールを持ったら離さない、パスをとらない等）

・極端に手加減をしてパスをしている児童がいる

・待機時間がながい（７分以上）

★ルールを変えて、実際のポートボールに近づけたい★

議題：試合をする上でルール・チーム編制をどう工夫すればよいか知りたい

グループ１	議題（教科力） 試合をする上でのルール・チーム編制の工夫	メンバー 教師A　他４名

良いところ

課題等

（環境）チーム編成・コートの工夫

- スピード感を出すなら実態ごとに分かれる
- コートをもっと狭くする⇒待機時間を短くする
- 試合で使用する曲を短く・スピード感があるものにかえる
- 待ち時間が長い２面つくる
- ボールをバウンドさせる位置を提示する

ルール・試合の進め方について

- 実態が高い生徒は立ち位置変えてパス・シュートを行う
- 前後半分けて、メンバーを交換する。同じチームを応援する
- 対教員で試合をする
- 実態が高い生徒は取り出しで対教員と試合をする↓勝ちたい！悔しい！という気持ちを引き出す

STの関わり

- STがせかすような声掛け

グループ２	議題（教科力） 試合をする上でのルール・チーム編制の工夫	メンバー 他６名

良いところ

ルールについて

ディフェンスを設けたことでゲームらしくなっていた

攻撃の流れについては、等質で繰り返し取り組んだことで、みんな何となく理解できている様子あり

課題等

ルールについて

ディフェンスができる児童もいるのであれば、ゴール前だけでなく、エリアを決めたり、自由にさせてもよかった

得点を表示することで競い合っていることを自覚させたい

シュートを打つ人は、ある程度動いてから打つ

全員がシュートできるような工夫

環境について

マーカーを必要のない生徒にはつけない
→動けなくなるから

ある程度の動いてよい範囲を決めて、教員がディフェンスに入る

力加減は、パスする相手を調整してあげる

チーム編成について

ゲーム感を出すのであれば実態別に分け、できる内容で行う
→対教員で試合

実態別にするほうがルールを設定しやすかった

集団討議による考察（教科の力）

実践②

①成果

・繰り返し取り組んでいたことで、ゲームの流れを理解していた。
・ディフェンスがいることでゲームらしくなっている。

②課題

・シュートを全員が打てるようにする。
・ディフェンスはある程度自由に動けるようにエリアを決める。
・コートを短くし、待機時間を減らす。
・チームを実態別にし、高い児童は対教員と行う。
・得点を表示する。

学習の様子（言語能力）

実践②

言葉でのやりとりを増やす

質問に答えている様子

児童に確認する時間の設定

実践②

ゴールマンに
ボールを
シュートした時の説明

ほとんどの説明を口頭で行っている

ガードマンの役割について

授業者の考察（言語能力）

実践②

①成果

・授業の導入で、競技名を聞く時間を設定した。
⇒「ポートボール」と答えられる児童が増えた。

・パスを受けるときに「はい」と言う児童が増えた。

・教師が「シュート」と声を出すことで
「シュート」という言葉と動作が一致してきた。

・ゴールマンにボールをシュートすることで得点に
なることが分かり、楽しさに繋がってきた。

授業者の考察（言語能力）

実践②

②課題

・並ぶ位置やシュートを誰がするかを、
子供同士のやりとり中心で決めていきたい。

現状

・子供同士のやりとりは少なく、
リーダーをしているという自覚も少ない

議題：チーム内で対話を増やすには
どうすればいいか

グループ１	議題（言語能力） チーム内（児童間）での対話を増やすには	メンバー 教師A　他４名

良いところ

十分ではないか

課題等

試合の前

順番やチーム名を決める。

チームの中でリーダーが順番を決める
作戦タイム
顔写真を使用

チーム内で目標を選択肢の中から選んで決める。

試合中

がんばれを言わせる
言われるとうれしい

チーム内で応援をさせる

やるべきことが多いと大変

グループ２

議題（言語能力）

チーム内（児童間）での対話を増やすには

メンバー
他６名

良いところ

少しでも言葉でのやりとりをさせようとすることは大切だと思う。

「はい」など現状でも十分にできていると思う

視覚的教材の使用

課題等

現状について

話し合いは難しいと思うため、言語能力の向上を狙うのであれば感想発表等でまかなう

自然な発言が出るような場面を作る
→実態に分けて

対大人で問いかけに反応、意見することも言語能力の高まりになるのでは？

実態的にみて子供間での話し合いややり取りを求めることは難しいのでは。

案

ゴールが入った時など、教員が言ったことを繰り返すことで、その場面でいうことを感じる
→「ゴール!!」「イエーイ!!」など

実態の高い子と低い子でバディを組んでミニティーチャーを作る

集団討議による考察（言語能力）

実践②

①成果

- 「はい」等、定着しているものもある。
- 十分ではないか。

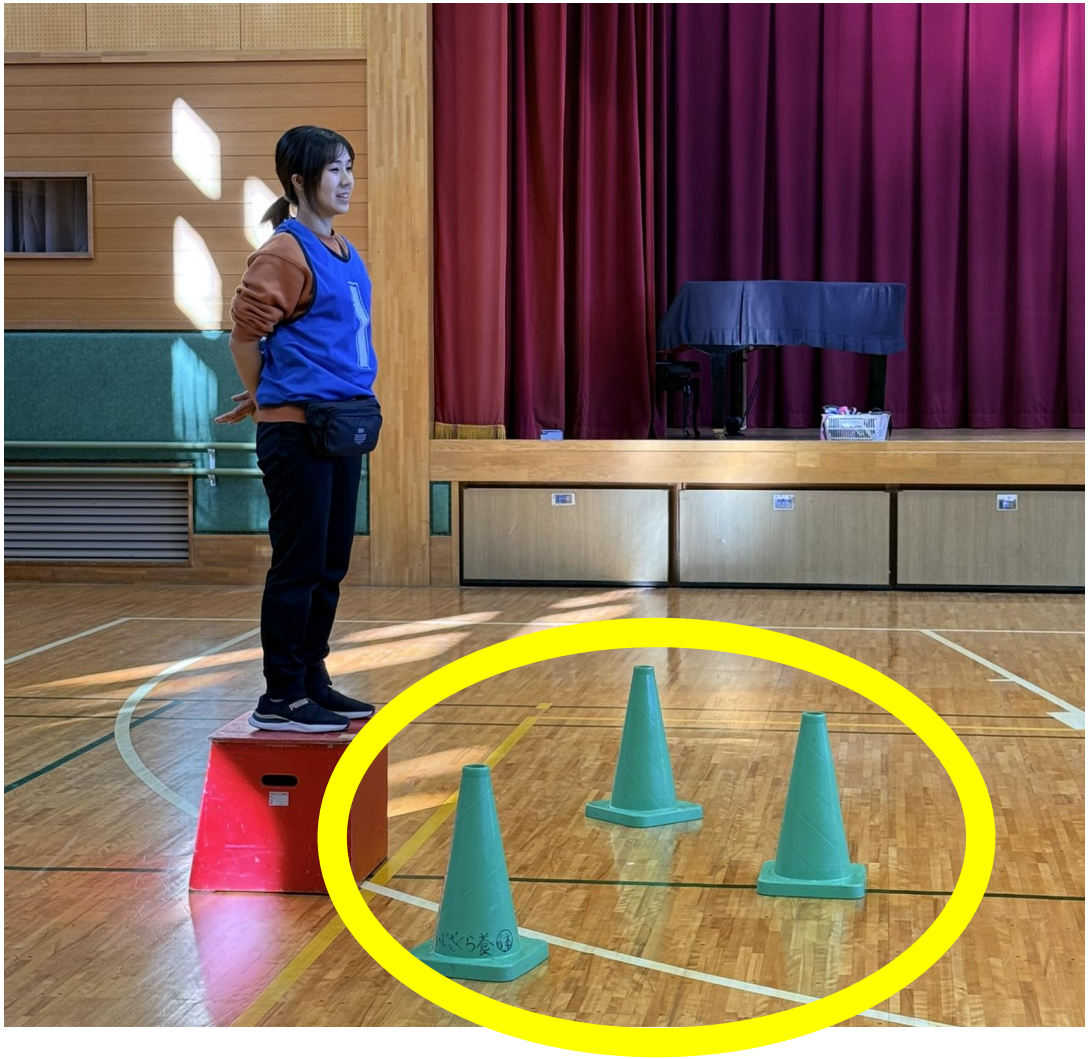
②課題

- 実態を考えると話し合いは難しいと思う。
- 顔写真を並べることで順番を決めたり、チーム名を決めたりすることで表出を促すのはどうか。
- 教師の発問に答える。
- 応援の言葉を増やす。
- 実態の高い児童×低い児童で組み、ミニティーチャーをするような活動を取り入れる。

学習の様子（教科の力）

実践③

ガードマン（ディフェンス）の動ける範囲を増やす



マーカーの上ではなく
コーン内であれば
自由に動いていいという
ルールに変更

実践③

得点を表示する

それぞれの場所でゴールしたら１点
↓
試合終了後合計点をだす

３回戦い、
合計点が高いチームの勝利

実践③

授業の最終回で優勝決定戦を実施

⇒前回の授業で優勝したらメダルをもらえることを伝えたことで、
児童の意欲があがった。

試合中の環境整備

実践③

・コートの距離を短くした
・試合中に流す曲の変更（３分半から２分半へ）

待機時間を減らす
スピード感アップ

・３回戦行うことで、
全員がシュート、ガードマンを経験することができた。

実践③

実態が高い児童について

・スペシャルチームとして実態が高い児童を取り出し、
その他の児童の見本をしてもらった。（対教員戦）

チーム編成について

実践③

・実態別に分けることはSTの数の関係で難しかった。
・チーム編成を検討していたため、何度かチームを変更したが、
ラスト４回は同じ色、同じチームで固定したことで
仲間意識が生まれるようにした。

実践③

実態が高く発語がある児童について

・点数表を見える位置に置いたり、
繰り返し活動に取り組んだことで、
「黄色チームは〇点だね」
「このままだと勝てないからぼくがシュートをしたい」
試合の流れやチーム内の役割を意識した発言が増えた。

・STが「誰がシュートやる？」等の声掛けをすると、
「〇〇くんがまだガードマンやってないね」等、気付いたことを伝えてくれる児童が出てきた。
発語がない生徒も挙手をすることでやりたい気持ちを伝えることができた。

・STが「あと〇点とれば△チームに追いつくね」等、
声を掛けると「がんばる」「負けたくない」等の反応が返ってくるようになった。

3　成果と課題

教科の力

グループ１ グループ２	議題 事例報告を通した子供の変化と「教科力の向上」についての手立て・支援・改善策 ※コミュニケーション、教材教具、環境設定、活動構成	メンバー 体育グループ全員

良いところ

教材教具の工夫

ボールの工夫やパスの距離を工夫することで恐怖感が減っていた

視覚的教材の使用

活動構成

自分でのコントロール→転がす→対大人のパス→対子どものパスのようにスモールステップで取り組んだことでボールを扱う楽しみが実感できた。

ルール設定

攻撃の流れについては、等質で繰り返し取り組んだことで、みんな何となく理解できている様子あり

課題等

ルール設定

ゲーム感を出すのであれば実態別に分けることで、流れやスピード感のある内容で行うことができる。
→対教員で試合
→ディフェンスができる児童もいるのであれば、ゴール前だけでなく、エリアを決めたり、自由にさせたりする
→ある程度の動いてよい範囲を決めて、教員がディフェンスに入る

得点を表示することで競い合っていることを自覚させたい

教材教具の工夫

ボールを紙のボールのままでもゲーム感・スピード感が出るかもしれない

ゴールマンとガードマンの区別として、服を派手にしたり、被り物をしたりすると分かりやすい。

言語能力

グループ１
グループ２

議題
事例報告を通した子供の変化と「言語能力の向上」についての手立て・支援・改善策
※指示理解の工夫、児童間のやりとり、言語表出を促した場面等

メンバー
体育グループ全員

良いところ

教材の工夫

視覚的教材の使用

CTが積極的に
言語化しようとしている

言葉の精選

パスの際に「はい」と
言う児童が増えた。

「ポートボール」や
「シュート」「はい」等、
競技名や必要な言葉を覚え
られた児童がいて良かった。

課題等

ふりかえり

活動後に振り返りで
言語化を求める

活動の合間合間に
何をしたのか振り返るといい

言葉のやりとりを増やす

自然な発言が出るよ
うな場面を作る
→実態に分けて

実態的にみて子供間での話し合いやや
り取りを求めることは難しいため、対
大人で問いかけに反応、意見すること
も言語能力の高まりになるのでは。

STの関わり方

ポートボールのルールや用具の
名前だけではなく、
勝ち負けの感情を表現する

STの教師が意図的に、
大げさにつかうのもあり？

ゴールが入った時など、教員が言ったことを繰り返す
ことで、その場面でいうことを感じる
→「ゴール!!」「イエーイ!!」など

［成果］

・付箋紙法の事例検討を通して、教科力、言語能力について検討することができた。教科力と言語能力の向上させるためには、①子供の実態に合わせてスモールステップで進めていくこと、②授業の流れを作り、繰り返し活動に取り組むこと、の２点が重要であることが分かった。

・体育は楽しみながら体を動かすことで、達成感や勝敗を味わうことができる教科である。また、試合等の中で子供同士のコミュニケーションが自然と生まれ、言語能力の育成に繋がりやすいと考える。振り返りの時間や友達の応援をする時間を意図的に設定することで更に言語能力の向上や社会性に繋がると考えられる。

・指導内容及び段階一覧を作成したことで、各学年の実態の幅や実施内容を一目で把握できるようになった。

［課題］

・言語能力の向上のためには活動の振り返り等を活用し、丁寧に対話をする時間を増やすことが有効であると考えられるが、限られた授業時間をどう活用するか難しさがある。

また、今回の事例検討を通し、言語能力を向上させるという点で子供同士のやりとりを増やすことに着目してしまいがちだったが、発語がない児童の、教師の言葉掛けに反応をするようになったり、周囲の応援の声を聴き友達の試合に目を向けるようになったりする変化も言語能力の向上に繋がったと言えるのではないだろうか。今後も様々な実態へのアプローチ方法を模索する必要がある。